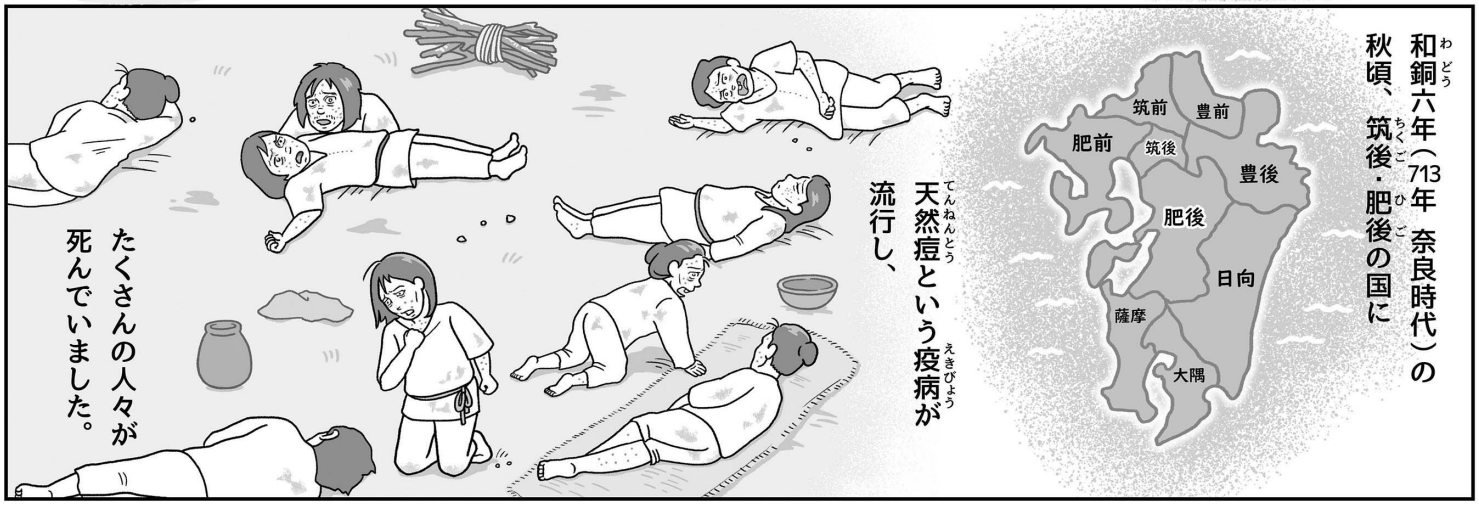
小天天子宮
火の神祭り発祥のいわれ

火の神祭り保存会編集

作画　中村明代

小天少彦名命神社（天子宮）

火の神祭り発祥のいわれ



お前が自ら
吾等二つの神を祀ればまつ
病気をなくそう。

肥後の国の
土車の荘（むらざと）の山の下に
清地を選んで、祀る場所を造り
なさい。二つの神とは、
大国主命・少彦名命のことである。

道君首名は、ありがたくお礼を言って
さっそく土車の荘を探しに行きました。

すると、土車の荘とは
今の小天の地でありました。

その頃の小天は民家が少なく
高く険しい大山（二の岳）の
ふもとにあり、

下を見ると白波が海岸を洗い、
神を祀るには最もふさわしい
場所でした。

首名はそこで
忌屋（身を清めてお祈りする小屋）を
建て、祭壇を造って、
十一月一日、自ら
神を招く祭りを始めました。

柊の木の枝を差し立て
少彦名神の神籬（神木）とし、
椎の木の枝を差し立て
大国主神の神籬として、
珍しくて美味しい
海や山の幸を献げました。

また、木を切りそろえて、
高さ一丈※、一辺一丈四方に
積み立て、
周りを枝葉で囲みました。

※一丈は約3メートル

首名は 忌屋にこもって、七日間
人々の病が治るよう祈り続けました。
しかし、なかなか効き目はあらわれ
ません。

そこで、七日目の夜に火を放ち、
庭火（かがり火）を激しく燃やして
言いました。

大君（天皇）が治める日本は
神様の国と同じで、
神様の偉大な力が
太陽のように光り輝き
人々を護ると言われている！

しかし、このように祈っても
効き目がないではないか!!

神様、
古くから伝わっていることは
間違いで、神様も名ばかり
なのでしょうか？

私がこの地の国司となった
ときにこのような災いが
起きたというのは、
私が至らない人間だから
でしょうか？

お告げに従ってお祀りした
二つの神様に本当に力があり、
人々の病を治してくださるならば、

私がこの火の中を渡っても
焼けることはないでしょう。

私の祈りが叶わず、大君が治める
この地に神様の力が届かない
ならば、しかたありません。

私は、目の前で人々が死んで
いくのは耐えられません。
この火の中で死のうと思います。

そう言うと首名は、
一番鳥が鳴く頃（深夜二時頃）、
祭壇に礼拝して大きな幣を
手に取り火の中を渡りました。

そばに仕えていた役人の塩見常知も、
あとに従って渡りました。

首名が引き返して再び渡ると、
塩見常知もまた、あとに従いました。

このようにして三度渡り
ましたが、二人とも足の毛
さえも焼けませんでした。

首名は、神様の偉大な力と
温かい心を感じて、
二本の神木の前に拝伏しました。

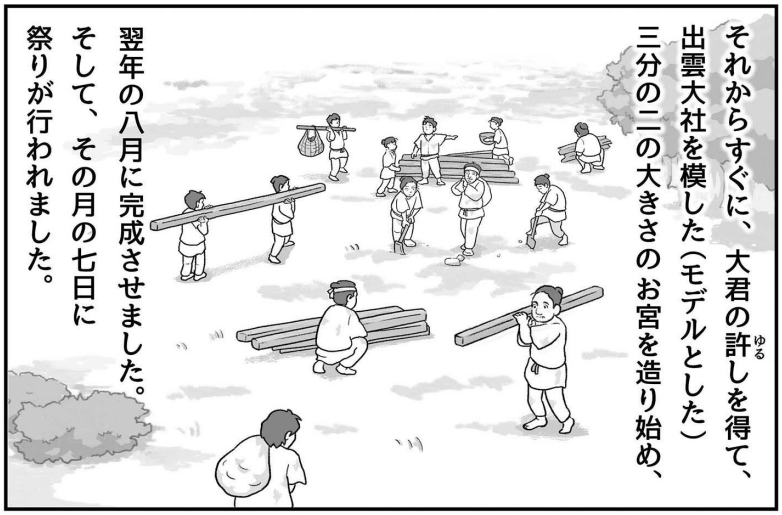
すると、二つの神様は、常知に
乗り移ってこう言いました。

お前の祈る様子を見ていると、人々を救おうと心の底から願っていることが分かる。筑後・肥後の二国の人々の病気や苦しみを救おう。
また、吾等二つの神は、永くこの地にいて二国を護ろう。そのためには、お前が二つの神を祀って、木の枝葉を茂らせ栄えさせなさい。

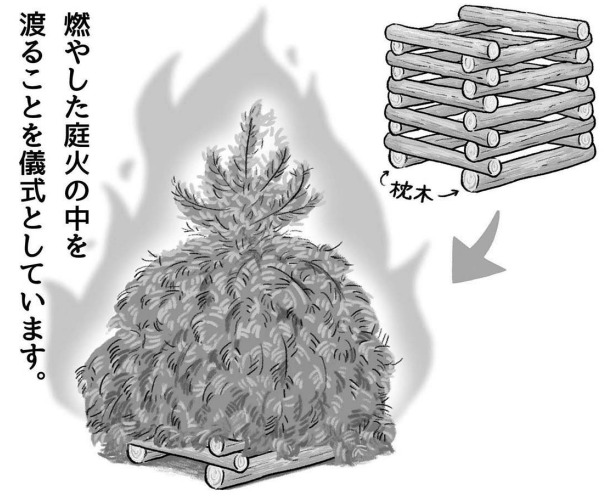
神社を造り神を祀ることを怠らないならば、祈りを全て叶えよう。
今やったように、庭火を燃やしその火の中を渡ることを、今後いつまでも祭りの儀式としなさい。

そういうと神様は、常知から離れられました。首名が驚いて頭を上げると、神木は一丈あまりの大木となっていました。

翌八日、調べてみると、数万人の人々が病から解放されており、皆が、首名の人々を思う温かい心に感謝し歓び合っていました。


それからすぐに、大君の許しを得て、出雲大社を模した（モデルとした）三分の二の大きさのお宮を造り始め、翌年の八月に完成させました。そして、その月の七日に祭りが行われました。

この神社は、当時築後・肥後の守り神としての信仰が殊更深かったそうです。
神田五百町（小天全域）、神戸（神社や神に仕える人のために働く人々）百戸が給われたといわれています。


祭りは 今に至るまで、高さ一丈、一辺一丈四方に木を積み立て、周りを枝葉で囲んで、燃やした庭火の中を渡ることを儀式としています。
枕木

現在、日本の各地で地域の人々が昔から受け継いできた祭りが、少子高齢化及び地方から都会への若者人口の流出により担い手不足になっています。また、ここ数年間、コロナウィルス感染防止のため祭りが中止になり、祭りのやり方の伝授が中断されています。このように地方の祭りは、存続の危機に直面しています。これは、先人達が長い間をかけて培ってきた日本文化の存続の危機とも言えます。

小天神社の“天子宮 火の神祭り”も例外ではありません。１３００年の歴史のある小天の宝“火の神祭り”を絶やすことなく未来に継承して行かなければなりません。それで先ずは、多くの人に“火の神祭り”に関心をもってもらいたいと思い、読みやすいように祭りの発祥のいわれを漫画にしました。

内容は、１５０８年（永年5年）に書かれた天子宮社記及び１６２９年（寛永6年）に書かれた天子宮旧記の内容を読みやすくしたものです。1人でも多くの人に読んでもらい“火の神祭り”に関心をもってもらえれば幸いです。

令和5年2月15日
火の神祭り保存会

枕木荷い

火押し